

北社会ニュース オキ号

2008年7月17日

来週、三連勝して甲子園に！

発行者： 鈴木壮夫

15日（火）の夕方、在仙の同期生より「延長戦で仙台工業に5-1で勝ったぞ」との電話あり。すぐ、母校の事務室に電話問い合わせベストエイトは4年振りと聞いた。準々決勝は球場の都合で来週21日より。二高は22日、聖和学園戦。聖和は男女共学となり04年秋、二高OBの佐藤漸監督（高48回生）を迎え、野球部員は100人を越す。昨秋の新人戦では県大会3位、育英・東北に次ぐ県内“第三勢力”と急成長のチームらしい。佐藤監督は二高時代、四番の好打者として鳴らし、大学を卒業後JICAで二年半タイ国のナショナルチームを指導し、野球の普及に務め開拓者魂にあふれた30才とのこと。そういう因縁の試合に勝って、次も次も勝って52年振りの甲子園出場の実現を！

（1）本日、第264回北社会

講師、佐々美喜男氏（高27回）～新内 如月派 鶴賀 喜代寿郎～

「新内流しの演奏会」

谷口知世・伊藤愛・村田有香・清水雅子・岡本彩香、五人の皆さんと演奏いただきます。妻が学生時代、中世演劇を学んでいたそうで、佐々さんの紹介文を拝読しながら、妻の講義(?)を聞きました。このことについては全く勉強もしなかったし、何～にも知らないんだな～と黙って聞いていました。多くの会員が初体験だと思います。佐々さんの夢先案内で情緒ある江戸の風物詩にタイムスリップさせてもらいましょう。

（2）来月以降の北社会

8月18日（月）講師：日向寺太郎氏（高36回）

「火垂るの墓を撮り終えて」

6月に送られてきた同窓会報を拝見して、早速北社会での講演をお願いして快諾いただきました。日向寺氏は1965年（昭和40年）11月生れ、木町通小一 仙台二中だそうです。新聞各紙に紹介されていますが、裏面に朝日・読売の記事を転載しました。岩波ホール（☎03-3262-5252）で上映中ですので是非、見てください。

9月16日（火）講師：庄司恒一氏（高22回） 仙台二高・校長

今、ハンガリーのブタペストにて「国際化学オリンピック」が開催されており、世界70カ国以上の国々から250人程の優秀な高校生が集まり頭脳を競っています。日本代表4人の内一人が二高・三年生の鈴木裕太君です。又、来月には英国イートンカレッジとのスポーツ交流等国際化が進んでいます。“新生二高”を語っていただきたいというのが私の希望です。

10月：山本敏晴氏（高36回）の「ツバルの海」映画上演と講演の予定です。

先週、七月十一日（金）夕刊掲載記事

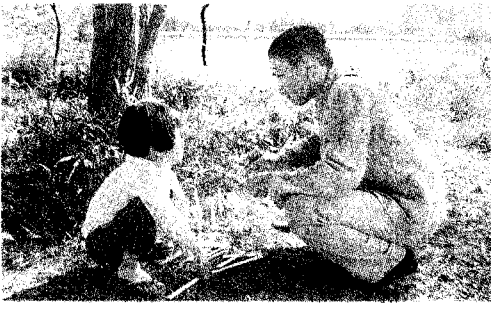
上段は朝日、下段は読売

「火垂るの墓」

感傷さげ描く生の情景

戦争文学の名作とうたわれ、野坂昭如の同名小説の映画化である。この原作には、

すでに、哀切きわまりないアニメ作品（88年、高畑勲監督）があつて、秀作のほまれが高い。今度は、日向寺太郎監督による実写版である。実写なりの工夫も凝らして、原



作の面目を新たにしている。これまた秀作である。

45年6月、神戸の空襲で孤児になった14歳の清太と4歳の妹の節子は、西宮の遠縁の家を身を寄せる。が、心無い仕打ちにたまりかね、その家を出る。兄妹は、螢の群舞する池のほとりの防空壕で暮らすことになる。

日向寺監督は65年生まれ。故黒木和雄監督の助監督などを経て、05年に、少年犯罪の被害者遺族の心情に迫る「誰がために」で監督デビューしている。この2作目は、黒木監督が温めていた企画を受け継ぐ形になったという。

日向寺監督の手柄は、第一に、鬱くほど抑制のきいた作品に仕上げたことである。痛ましい話を語りながら、感傷

に訴えるのを意識的にさげている。そのことが、どこか凜とした気配を生み、映画に深さをもたらしている。

第二は、絶妙な配役。兄の吉武伶朗、妹の畠山彩奈がすばらしい。殊に5歳の畠山の演技には舌を巻く。

第三に、原作にない挿話で、時代の狂気を伝えていること。御真影を焼失して一家心中する中学校長と、隣組に殺されるニヒルな学生が、映画に厚みを与えている。

母の死を知って、気がふれたように走り回る清太、衰弱して幻覚に遊ぶ節子……。人間の生の情景は、感傷を超えて、胸をうつ。

あれから60有余年、人の思いと時の流れをたっぷり含んで、実に重い映画である。

（秋山登・映画評論家）
東京・神保町の岩波ホールで公開中。

エンターテインメント

戦時中、過酷な運命をたどった兄妹の姿を描いた「火垂るの墓」が公開中だ。生前、黒木和雄監督に師事した日向寺太郎監督が写真が、遺志を継いで、戦争という題材に挑んだ。

原作は野坂昭如の小説で、1945年の神戸空襲で被災した兄妹が、母を失い、飢えに苦しみなながら、生き抜こうとする。「美しい夏キリシマ」「父と暮せば」などで、戦争を描いてきた黒木監督による映画化が進んでいたが、2年前に監督が急逝した。故人と10年近い親交があり、「美しい——」で助監督を務めた日向寺監督に、後継の白羽の矢が立った。

「ありがたい話だったが、荷が重過ぎるとお断りしたんです。で

「火垂るの墓」 日向寺太郎監督

も、美術監督の木村威夫さんから「戦争を知らないことは、心配しなくていい。戦争をただ再現するのではなく、表現として成立させればいい」と励まされたんです」

1965年生まれの日向寺監督は、「戦争体験を語る人間」でなく、「語られたことを受け止める側の人間」だ。野坂の体験、黒木監督から聞いた体験をどう受け止めたかを映画化しようとした。「原作は、死者をどう弔うか、という話だと思った。兄妹の母は死んで、物のように扱われる。それに対し、兄妹は死んだホタルに一匹一匹名前をつけて弔う。何万人という人が死んで大変だった、と語るのではなく、死者を大事にしなかった戦争について語ろう、と考えました」

その思いは、「現代人も、死者を背負って生きているはずだ」という意識に発展し、原作や高畑勲監督のアニメ映画と異なるラストシーンにもつながっていった。

「過去の物語として、完結させたくなかった。主人公が、今を生きる我々に重なるって見えるようにしたかったのです」



死者の重み語りた